



日本キリスト教団
三軒茶屋教会

三軒茶屋 教会通り

〒154-0024
第21号 2004年8月発行 東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5
TEL/FAX: (03)3418-4933
編集/発行: 広報部

剣をさやに納めよ



牧師 陣内厚生

今は昔、セピア色に映るいくつかの情景が、しかし鮮明な絵となって思い出されます。六十数年前、日本の戦時色が一層濃くなった時代と共に生まれ、幼少時には軍靴の音を聞きながら育った私は、子ども心に戦争の欺瞞と悪夢を焼き付けられてきたのです。

私の生家は九州の小さな城下町、その駅通りであったので、出征兵士を送り出す駅頭の光景を数多く見てきました。また千人針（兵士の武運長久を祈るため一片の布に赤糸で糸玉を縫いつける）を、一針ずつ多くの女性に依頼して回る愛国婦人会のおばさんたちの姿も。私の幼稚園時代は、戦地に送る慰問袋を作ったこと、軍艦や戦闘機の絵を好んで描いたり、戦争ごっこに興じたりした日々を思い起こします。

やがて戦況が傾く一九四四年、国民学校（小学校）に入ってから、いわゆる銃後の守り（国民生活）は惨めになるばかりでした。紙面では書ききれないほどの思い出が詰まっています。日の丸弁当、金属品供出

（弾丸や兵器をつくるため）、松ヤニ採取（飛行機などの燃料）、防空壕掘り、防空演習、いも畑開墾、灯火管制、竹槍づくりなど。学校では毎日朝礼で東方遥拝、軍人勅諭の朗誦をやり、奉安殿（天皇の写真と教育勅諭を安置した）に最敬礼、さらに神社に全校生徒が赴き戦勝祈願をするなど、徹底的な皇民化教育が行われていました。もうすぐ神風が吹くことを信じて――。

しかし、四五年八月、二発の原爆投下に続く敗戦。呆然自失となった大人たちを見ながら、戦争の恐怖と思想的呪縛からの解放感を、子どもの心で味わいました。不滅の苦のわが国体は、昨日までの軍国主義が黒板消しで消したように一掃され、占領軍による民主化政策が進められることとなりました。教科書の墨ぬり（好戦的な文章を消す）をやったのもこの時です。国中が食糧難、住宅難、物資不足、一方で復員兵や外地からの引き揚げ者の帰還など、混沌たる戦後時代が続いたことを忘れることはできません。

敗戦の翌年、再開された地元の教会の日曜学校に、私は通い始めました。大げさに言えば、新しい生き方をキリスト教の中に見出したというわけです。やがて新憲法発布（四七年五月）により、小学校では「あたらしい憲法のはなし」という副読本で、平和日本を実感し感動したものでした。思い返せば、幼い人生のたかだか十年位のうちに、なんと激しく大きな歴史の転換を経験したことだろうかと驚くばかりです。

ところで、この戦争の時代をトータルに把握することができるようになった時、それまで原爆を被った被害国意識しかもてなかったのが間違いであることに気づかされました。戦争によって奪われたアジア諸国の二千万の人命を思うと、加害国日本の罪責はあまりにも大きすぎます。イエスのみ言葉に聞きましよう。「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。」平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。平和の主がおられることが分かります。